

オータム・スクール 開催報告

小川明子

グローバルメディア研究センターでは、2015年11月28-29日の二日間、メディアの世界に就職や進学を考える大学生を対象にオータム・スクールを開催した（無料）。参加者は名古屋大学をはじめ、東海地方や東京の大学生／研究生12名。いずれもメディア・コミュニケーションの世界に携わりたいことを希望する学生だけあって、想像以上に質問や意見が交わされ、とても活気に満ちたセミナーとなった。最先端のメディアの現場でご活躍の講師の講演、質疑応答は、センターの教員にとっても多くを学ばせていただく機会でもあった。以下はファシリテーターとして同席した大学院生による報告をまとめたものである。

■ドキュメンタリーの現場 2015.11.28 10:30-12:30

講師：メーテレ報道部 安藤則子氏

ナビゲート：教授 河村雅隆

講義は、まず、安藤さんが小学校のとき、先生が見せてくれたという石川文洋の写真（ベトナム戦争時、米軍兵士がベトナム少年の死体を持っている写真）を見て衝撃を受けたという経験から始められた。続いて原爆でたたかれた背中が写された尾糠政美氏撮影の写真 프로젝ターで投射。これらの記録写真が撮影されていなければ、原爆の真実に近づくことができなかつたかもしれない。権力が隠したいものである場合、写真がなければ、実際にあった事実でも、なかつたことにされかねない。記録することは重要だ。



続いて、原爆が投下された翌日、広島市に入り、残留放射線によって被爆したと訴える甲斐昭さんを追った安藤氏制作のドキュメンタリー「ヒバクコク」が上映された。残留放射線による被害については、報道のドキュメンタリーチームで議論し、学びながら作り上げたという。

原爆について考えるドキュメンタリーは数多くある。しかし、この番組は、身近な東海地方に暮らす甲斐さんの訴えから始まり、アメリカにも核実験による被爆者が少なからず存在していること、そしてアメリカの核の傘の下にある日本で、残留放射線の被害が長らく無視されてきたこと、そして同様の状況が世界各地に見られることな

どが指摘され、核と世界を見渡す興味深い構成であった。安藤氏によれば、初めからしっかり構成があって撮影し始めたというよりも、人から人へと紹介されていくうちに新たな事実が発見されるという繰り返りで構成を書き換えていったという。

同時に、質疑応答では、カメラが入ることの責任と、入った以上は伝える責任が生じることの重さとやりがいについて考えさせられた。また科学的な内容を扱う番組の場合、少しでも科学的に立証できないことがあれば科学者からの攻撃対象にもなりかねないことなど、ドキュメンタリー表現の成果と課題についても学ぶことができた。(渡辺真由子)

■外資系広告会社の仕事 2015.11.28 13:30-14:45

講師：マッキンワールドグループモメンタムジャパン 神尾太紀氏（メディアコース13年度卒業生）

ナビゲート：客員教授 栗林芳彦

メディアコース卒業生で、外資系広告会社で活躍中の神尾さんから、その仕事や環境、雰囲気などを、豊富なエピソードを交えて紹介していただいた。最初に、神尾さんのお仕事紹介を兼ねて、外資系広告会社の仕事について説明された。その後の本学客員教授 栗林先生とのディスカッションでは、グループで成果を出す日本の広告会社と



比較しながら、個人の能力が重視され、自由に仕事を進めることができる外資系の利点とともに、その困難も示された。その後も広告会社に向く人材像をめぐる質疑応答や、広告の仕事についての討論が活発に行われた。神尾氏のプレゼンテーションは、いかにも広告マンらしく、デザイン、話の進め方などがとても魅力的で、広告には「パフォーマンス」が重要だということを感じさせてくれるものだった。(臧若鴻)

■メディア制作入門 2015.11.28 15:30-16:30

講師：准教授 後藤明史

まだ社会的に普及していない新しい技術、全方位カメラとアイ・トラッキングカメラの実物を前に、この新しいメディアの可能性を探るワークショップが行われた。この新しい技術で何を撮りたいかをグループで対話しながらアイデア出しをし、それをもとに、このカメラを使った新たなメディア研究案とビジネスの提案をひ



とつずつ選んで発表した。人気アーティストのコンサートでアイ・トラッキングカメラをつけたビデオを販売するなど、若者らしいアイデアも多く出された。

新しいテクノロジーがメディアになる瞬間を実感できるすばらしい経験だった。(臧若鴻)

■ メディア英語 2015.11.29 10:00-11:30

講師：教授 ヘイグ， エドワード

この講義では、まず、参加者は自己紹介とオータム・スクールに参加する理由を英語で書いて発表。そののち、大学院で開講される「メディア英語」の授業内容についてヘイグ先生から説明があった。模擬授業として、“Lingohack”というBBCの英語教材サイトを紹介いただき、ビデオと記事を見つつ、内容の理解とともに、自分の感想、そして、メディア分析という三つの視点からアプローチする面白さについて語られた。



BBCのサイトを使って英語を勉強する方法は学生には斬新で、自学学習にも実用的であることに気づかされた。ネットに載せられた記事もビデオも、実はメディアの産物でもあるというヘイグ先生の視点もきわめて興味深いものであった。(臧若鴻)

■ アイデアソン「次世代のメディアを構築する」2015.11.29 12:15-14:15

講師：キャッチネットワーク社員

ナビゲート： 准教授 小川明子

刈谷市に本拠を置く地域情報メディア、キャッチネットワークと共同で次世代の番組やサービスについて構想するワークショップを行った。

まずは、テレビとインターネットのグループに分かれ、ホワイトボードや付箋を用いて、各メディアの利点について各々語りあったのち、そのメディアの欠点についても挙げていった。それらを



踏まえた上で、地域に暮らす若い視聴者／ユーザーを対象にした番組やサービスの企画を、グループごとに二つ考案して企画書にまとめ、そのうちひとつをアクティング・アウトという寸劇で表現した。

企画立案→寸劇の課程で、他者が各メディアに接している状況が改めて明らかになったり、現在のテレビに欠けているもの（生放送への期待と困難、一般人を出すことをめぐる忌避、女性の視線など）が浮かび上がるなど、いくつか刺激的な知見が得

られた。同時に、ワークショップに関わってくださったキャッチネットワークの方からたびたび示される送り手の立場からの意見も、学生たちには現場を垣間見る経験になったようだった。(小川明子)

■国際報道の現場 2015.11.29 14:30-16:30

講師：共同通信 五井憲子氏

ナビゲート： 教授 中村登志哉 准教授 井原伸浩



女性特派員のさきがけである五井氏からは、国際報道がいかなされるのかをご教示いただいた。イメージとは異なり、五井氏が経験された海外特派員支局は、概ね一人で、その国や近隣の政治、経済、文化など多方面の記事を書かねばならないのだという。また大事件や災害が起これば、近隣諸国にもすぐに応援に行かねばならない。一方で、名刺ひとつでローマ法王やシンガポールのリ・クアンユー氏といった世界の首脳陣にも会うことも可能な、実に刺激的な現場でもある。五井氏は、会場からの質問に対する応答で、市井の人から首脳陣まで、とにかく取材対象者に信頼されるよう心がけることが記者／特派員として重要であることには変わりないと述べられた。

華やかに見えるお仕事的一方、その国に関して伝えられる情報の取捨選択が自分の責任にかかってくる大変さもお伝えいただいた。特派員の多様な側面を感じることのできる講演だった。(渡辺真由子)